

で一時に改伐を勝利必定す。且赤穂の浮田勢は素来反覆が弱
兵をきび強き方を試して一途に伐くべからず。赤の浮沈身の安危唯遠
一舉に便着ひ。十死のうちふ一生の合戦せざへかと席をわてぞ稟さ
れどる。然ふ小早川隆景は才智最厚深ければ只條糾抜矣。合戦
をもれく後すらの名将かく率尔に禽族かば。因を閑院を以て思惟
伏姫（おもむけのめ）かくたる也。元春焦躁て席を進まし。之ふ隆景のま元長の言
せ一とまろへ一程ありこそを聆られ。息流元長は魁を歿せ。乃夫後陣に
速く攻を。羽柴は勢を頽崩えんと。嘗て物を捨るが如。を益より真を
遣らん。一戰ふ事成敗をのつか。別よ方術ひらずと宣ひよを。隆景
にをうち驚顎て。同日一夕。發ふ元春御父子の命詞理に當りて覺え
ひ。敵の後陣れ到らぬにて。存亡の合戦をあどび。緯然も置しては登工。
漸く同公せらきらるか。然ば明日へ列戦して敵自軍の目を驚かべと高
齋（さち）一決したじと。毛利の後家三澤萬虎といふ者。所志せ秀吉に
通ド及軍をの密計ありと。密は若る輩あるやど。自軍の目を驚かべと高
齋に心急地絆ひ生ト。彼輩の敵に一自あし。進兵を導て自方の陣に敵くむるを
どりふまい。或ハ秀吉小賴きく。両將の首を頽欲に降うんともするをあ
里かど。さゆくに言噪ぎたる是食羽朱が密計より出する祠を知ぶり。され
ば各公を閣合て。明日の軍を愉快進まんともる氣色かけを此ふ軍もあ
くがく。亦延済ふやうくる。風流美諭にて言訛して。佐長近日二十餘万
の太軍ふく。推進るよりかる。自軍は毛利三家の下。援軍の勢も少う
これを。遙かの事すとく多く。決ても射陣の力及んで。元春隆景を遠
くねうち。陣を拂ふて帰國を。私語合てかふとやらん。諸軍の足も